

1918年の全国発明品博覧会に関する分析

—久留米市での開催とその組織—

西 尾 典 子

はじめに

1918（大正7）年4月15日から5月20日にかけて、久留米市において全国発明品博覧会という催しが開催された¹。この催しの正式名称は、久留米市開催全国発明品博覧会というものであった。

博覧会の広義の意味は、産業や技術あるいは文化の発展に寄与するような様々なモノを収集し、それらを公衆に広く披露する催しのことである²。近代日本における博覧会については、西尾典子（2023）において先行研究について詳細なサーヴェイを行った。

その結果の1つとして、近代日本の博覧会、乃至はそれに類似する性格を有する催しについて、次の4つに分類することができた³。その分類とは、①万国博覧会（以下では、単に万国博と略述する…執筆者注）、②内国博覧会（以下では、単に内国博と略述する…執筆者注）、③共進会などの博覧会に準ずる催し、④地方博覧会（以下では、単に地方博と略述する…執筆者注）の4つである。厳密に言えば、これらのどこにも分類できない博覧会を、⑤その他の博覧会として区分

1 全国発明品博覧会（1918）、「凡例」。

2 西尾典子（2023）、1頁。博覧会の定義については、新村出（2008）、2333頁並びに小学館国語辞典編集部（2006）、48頁を参照した。

3 西尾典子（2023）、6頁。

4 西尾典子（2023）、16-17頁。

したが、ここではそのことに関しては割愛する⁴。

本稿では、久留米市開催全国発明品博覧会（以下では、単に久留米発明博と略述する）に焦点を当てて、分析を行っていくわけであるが、この博覧会は上述した分類でいえば、④地方博に該当しているといえる。そのため、ここでは地方博に関する研究史に着目して、それらを整理したうえで、本稿の論点を述べていくこととしたい。

近代日本の地方博に関する今現在の研究の到達地点と、その研究史が抱える問題点については、西尾典子（2023、14 - 16頁）において既に述べたとおりである。結論から先に述べておくと、地方博に関しては石上敏（2012）で既に指摘されているように、地方博と呼称されているものが、いったいどのように定義され、どのような内実を持つものなのかということについては、現段階でまだ明確な結論が出されていない。

そのため現段階の研究水準としては、石上論文で論点の1つとして着目されたことが、地方博研究の大きな課題となっているといえる。このことが課題となっている原因の1つとして、地方博研究の蓄積がその他のテーマと比して未だに希薄であること、すなわちサンプル数が少ないことを指摘することができる。偏に、この問題を解決するためには、ひたすらサンプル数を増加させていくしかないといえるのである。そのような観点からいえば、本稿は研究蓄積における貴重なサンプルの1つとして位置づけられることになるであろう。

本節では、西尾典子（2023）でサーヴェイしたことに基づいて、石上論文が指摘した議論に至った過程も含め、包括的な枠組みである地方博に関する研究史整理をまず行っていく。そして、そのうえで本稿において詳しく分析していく久留米発明博についての概略を述べる。

近代日本の地方博をめぐる研究について鳥瞰すると、1980年代から発表され始めていたことがわかる。横山秀樹（1980）では1872年と1874年に新潟県で開催さ

れた博覧会に、P.F.コーニッキー（1986）では1872年に和歌山県で開催された博覧会に、丸山宏（1986）では明治初期に京都で開催された博覧会に、それぞれ焦点が当てられた。

2000年代に入ると、地方博に関してまとめられた1冊の編著である福間良明ほか編（2009）が出版された。この編著の中で、戦前期については大阪府や北海道で開催された博覧会について焦点が当てられた⁵。この編著のほかにも同年には、1933年に宮崎県で開催された博覧会に焦点を当てた論文も発表された⁶。このように、万国博や内国博などの研究蓄積と比較すると、その研究蓄積は希薄なものであったが、地方博に関する研究蓄積は漸次的に進められ、2000年代に入るとある程度まとまったかたちで書籍化される研究書も現れるようになっていったのであった。

以上述べたように、2000年代に地方で開催された博覧会に関する研究蓄積がある程度図られたことによって、2010年代に入ると地方博をめぐる議論が、既述のごとく複雑化していくこととなったのである。

福間良明ほか編（2009）に対して、疑問を投げかけたのが2012年に出版された石井敏論文であった。もっと踏み込んでみると、石井敏（2012）は、単に福間良明ほか編（2009）に対して疑問を投げかけただけというよりも、既存の地方博研究についてより根源的な問題提起をなした研究論文でもあった。この点が重要な点なのであるが、それは具体的にどういうことであったのかということに関して、ここでフォーカスしておこう。

これにあたり、石井敏（2012）の第3節の冒頭を引用しておく。

5 石田あゆ（2009）が大阪府、坂田謙司（2009）が北海道において開催された博覧会に関してそれぞれ分析した。

6 長谷川司（2009）。

では、改めて「地方博覧会」（地方博）とは一体どのような博覧会を、あるいは博覧会の何を指すのであろうか。近年の博覧会研究の出色の成果である『博覧の世紀』（梓出版会、二〇〇九年）の編者の一人・谷本奈穂氏が、この本の内容紹介で、「（本書は）地方博覧会について考察したもの」と明確に要約している通り、この本は、専ら地方博覧会を取り上げて考察した最初の研究書であった…中略…しかし、では、地方博覧会とは何であるかということ、その定義にせよ、範囲にせよ、あるいは一覧であってもいいが、本書からは地方博覧会の全貌どころか、地方博覧会が一体何であるかが今一つ見えてこない。（79頁）

この指摘にみられるように、石井敏（2012）によって、既存の研究では地方博覧会について何の定義も、あるいはその範囲も未だ示されておらず、そのために地方博覧会が一体どのような全貌を持つもので、いったい何者であるのかという説明が十分になされてきていないことが白日のもととなったのである。

さらに石井敏（2012）は、「単に『地方で開催されたから』という理由で、それらをすべて一括して『地方博覧会』と呼ぶことには注意と留保が必要である」として、地方で開催された博覧会を地方博と総称することの危険性をも訴えている⁷。

この一節に続いて、「地方博の最大の根拠はその主催者であるという考え方…中略…も有効であるが、完全に地方博を把握できるわけではない」とも指摘されている⁸。この論文でさらに注目しておかなければならないのは、上記に続く次の分析である。

地方博覧会を考える上で、「地方博覧会」（地方博）という呼称が一般化したのが、いつのことだったかを押さえておくことは重要だろう。私見によれば、

7 石上敏（2012）、78頁。

8 石上敏（2012）、78頁。

岡山博・高松博・松山博が同時開催された昭和二十四年（一九四九）が、その早い例である。つまり、管見の限り戦前には「地方博覧会」という呼称は用いられていない。…中略…そして、この時にも、たとえば「高松博」の公式名称は「観光高松大博覧会」であって、「地方博覧会」を公式に名乗ったわけではない。（78頁）

そして、この際に発行された記念切手が一般に「地方博切手」と呼称されるようになり、地方で開催された博覧会が、地方博ないしは地方博覧会という呼称へと一般化されていく役割を担ったのではないかということが推察されている⁹。

さて、2012年は地方博に関する研究が進展した年であった。上述した石上敏論文以外にも、地方博そのものに注目し、網羅的な検証を行った大貫涼子（2012）が発表され、出品物や各博覧会が開催された目的などに焦点があてられた。大貫涼子（2012）の最大の成果は、地方博の一覧を提示して、明治期を通して地方博が開催された方法やその目的を検証したことである。そして、この研究によって地方博に地域の活力増強が期待されていたことが明らかとされた。

これら以外にも各地方・地域研究の一環として、地方博を扱った研究は存在し、ケース・スタディズの蓄積が進展しつつある。まず明治期の焦点を当てた研究としては、筑摩県の事例を検証した塩原佳典（2012）や、会津地方の事例研究を進めた大野真由（2016）、1879年に開催された長崎県の事例を検証した佐野実（2021）が挙げられる。地方博は、1930年代に再びブームとなったのであるが、この時代を扱った研究としては、金沢の事例を検証した小川玲美子（2015）と、富山県の事例を検証した尾島志保（2016）が確認出来る。

ここで、今一度地方博研究を遂行していくうえでの注意点を確認しておこう。

9 石上敏（2012）、78頁。

石上敏（2012）で指摘されているように、①近代日本において地方博という名称で開催された博覧会は存在せず、②地方博という呼称が一般的に用いられるようになったのは戦後のことであった。しかし、それにも係らず③研究史上において、ただ地方で開催されたという理由で何の概念規定もなく地方博という呼称が用いられているのである。この点について、その後の研究蓄積に基づき地方博がどのように定義されるものであるのか明確に示した研究は、管見の限りまだ存在していない。繰り返しになるが、この原因の一つには、地方で開催された博覧会に関する研究蓄積が、万国博や内国博や共進会などの研究と比較しても僅少であり、サンプル数が少ないことを挙げることができる。

この問題を解決するためには、さらなる研究蓄積が必要不可欠であり、本稿では事例の一つとして1918年4月15日から5月20日の期間に開催された久留米発明博について注目していきたい。なかでも特に、同博覧会がどのような担い手たちによって推進されたのかについて焦点を当て、久留米市という都市において、なぜ発明品に特化した博覧会が開催されたのかについても考察を加える。

この久留米発明博についてであるが、先行研究となる論文は存在しておらず、当該博覧会についての記載があるのは管見の限り、久留米市役所（1933）に資料紹介として当時の報告書が復刻されている程度である。資料についてであるが、筆者は新資料である全国発明品博覧会（1918）を入手したので、本稿において久留米発明博に関する議論を一步前に進めたい。

この下処理として、まず第1節で久留米市役所（1933）に復刻された報告書と全国発明品博覧会（1918）についての資料批判を展開する。なお付け加えておくと、久留米市史編さん委員会編（1985）には、当該博覧会についての記述は見当たらない。

続いて、第2節においては、久留米発明博が開催された経緯について検証していく。この際に、当該期の世界的な情勢の変化と、その影響を受けて日本の産業

界、ひいては社会が何を重視し、何を求めたのかという点についても考察を加える。そしてそのうえで、久留米発明博を運営する組織の根拠となった制度などにも焦点を当てる。

第3節では、久留米発明博を運営した組織と、その担い手が具体的にどのような人的構成であったのかについて分析する。これらの分析を通して、久留米発明博の担い手にどのような特徴があったのかについてまで言及したい。

第4節では、なぜ久留米市において開催された博覧会が、他の何かをテーマとしたものではなく、発明品をテーマとするものであったのかについて検証する。

なお、本稿を執筆するにあたっては、年号は和暦ではなく西暦を採用し、資料の引用にあたっては旧字を新字に、仮名の場合には片仮名を平仮名に改めている。

1. 久留米発明博に関する2つの報告書の比較検討

「はじめに」でも述べた通り、久留米発明博について実証研究を行っていく際に、その寄る辺となる資料については、久留米市役所（1933）に復刻されている資料と、筆者が入手した全国発明品博覧会（1918）とが存在する。本節では、まず本稿の論拠となるこれらの資料について、比較検討を行ったうえで解説を加えていきたい。

まず、既述の2つの資料について、それぞれ説明を加えておく。

久留米市役所（1933）は、1932年に12月26日に印刷され、翌1933年1月8日に発行された自治体史の『久留米市誌』（中編）である。この書籍には、久留米市の歴史的な出来事が網羅的に所収されている。久留米発明博については、この書籍の313 - 335頁に復刻された資料が掲載されている。

一方で、全国発明品博覧会（1918）は、久留米市役所（1933）が出版される15年前に書かれた久留米発明博に関する報告書である。この資料は全国発明品博覧会（1918）の「^{ママ}凡例」によると、「本帖は、大正七年四月十五日より、同年五月

表1 『久留米市誌』中編と『全国発明博覧会記念帖』の比較

A 『久留米市誌』中編				B 『全国発明博覧会記念帖』			
目次				目次			
章	節	備考		章	節	頁	AとBの比較
役員や会場、出し物や出品物などの写真多数あり				役員や会場、出し物や出品物などの写真多数あり			
凡「ママ」例				目次			
全国発明博覧会規則	※1	総論	1	総論	1	1	章に関しては、Aには記載なし、Bには記載あり。
	※2	治革	1	1 治革	1	1	※1は、ABともに同様の記載あり。
	※2	趣旨	1	2 趣旨	1	1	※2については、AにはHBの一部が記載されているのみであり、Bの「第二章規則」以降の部分の記事が欠損している。
	※3	1 総則	2	2 規則	2	2	※3については、AにはHBの一部が記載されているのみである。Aには第二十三条までしか記載がなく、Bには記載されている第二十四条から第三十二条の部分が欠損している。加えて、AにはBには記載されている「即売品扱所規定」（6 - 9頁）以降に関する記事がない。
	※4	2 組織	9	3 役員	9	9	※4については、AにはHBの一部のみ記載されている。Aでは「庶務部」以降の記載が欠損している。加えて、9 - 12頁部分の記載なし。
	※4	3 審定	12	4 庶務及事務分掌	12	12	章に関してAには記載なし、Bには記載あり。
	※4	4 処務権限	12	1 処務規定	12	12	Aには記載なし、Bには記載あり。
	※4	5 土地	13	1 土地	13	13	章に関してAには記載なし、Bには記載あり。
	※4	6 建物	13	2 建物	13	13	AとBで記事の小題は一致しているが、記載されている文面や内容がそれぞれ異なる。かつ、Bに比べてAの内容が希薄である。
	※4	7 徽章	15	6 徽章	15	15	AとBで記事の小題は一致しているが、それぞれに記載されている文面や内容が異なる箇所も散見される。かつ、Bに比べてAの内容が希薄であり、Bに記載されている別図もAには添付されていない。
出品動勝	※5	1 出品動勝	15	1 出品動勝	15	15	Aには記載なし、Bには記載あり。
	※5	2 出品人員及数量	15	2 出品人員及数量	15	15	章に関してAには記載なし、Bには記載あり。
	※5	3 出品の承約、即売	16	3 出品の承約、即売	16	16	Aの※5の記事は、Bの「出品動勝」と「出品人員及数量」という二つの記事を要約した内容であり、文面を見ると両者に記載されている内容が若干異なっている部分がある。
	※5	4 出品の看守	17	4 出品の看守	17	17	Aには記載なし、Bには記載あり。
	※5	5 各省の出品	17	5 各省の出品	17	17	Aには記載なし、Bには記載あり。
	※5	6 教育品と洋画	17	6 教育品と洋画	17	17	Aには記載なし、Bには記載あり。
	※5	7 各省の出品	17	7 各省の出品	17	17	章に関してAには記載なし、Bには記載あり。
	※5	8 教育品と洋画	17	8 教育品と洋画	17	17	Aの※6の記事の内容は、ほぼBに記載されていることと一致しているが、細部に異なる点が確認される。
	※5	9 各省の出品	18	9 各省の出品	18	18	Aには記載なし、Bには記載あり。
	※5	10 教育品と洋画	18	10 教育品と洋画	18	18	Aには記載なし、Bには記載あり。

A『久留米市誌』中編	B『全国発明品博覧会記念帖』		
	目次	章	節
	章	節	頁
※8	館外の装飾	装飾	18
			1 館外の装飾
※9	館内の装飾	装飾	18
			2 館内の装飾
※10	審査の概況	審査及表彰章	19
			1 審査の概況
※11	開館式	儀式	19
			2 審査の結果
※12	表彰褒章授与式	儀式	19
			1 開館式
※13	閉館式	儀式	21
			2 宛明家表紙式と褒章授与式
※14	運賃割引	運輸	29
			3 閉館式
※15	輸送	輸送	31
			1 立札
※16	輸送	輸送	31
			2 総ピラ
※17	輸送	輸送	33
			1 出品物の割引
※18	輸送	輸送	33
			2 乗船乗車賃割引
※19	輸送	輸送	35
			1 売演即売
※20	輸送	輸送	35
			2 普通売店
※21	輸送	輸送	36
			1 郵便
※22	輸送	輸送	36
			2 電話
※23	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※24	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※25	輸送	輸送	39
			3 消防
※26	輸送	輸送	39
			1 輸便
※27	輸送	輸送	36
			2 電話
※28	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※29	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※30	輸送	輸送	39
			3 消防
※31	輸送	輸送	39
			1 輸便
※32	輸送	輸送	36
			2 電話
※33	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※34	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※35	輸送	輸送	39
			3 消防
※36	輸送	輸送	39
			1 輸便
※37	輸送	輸送	36
			2 電話
※38	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※39	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※40	輸送	輸送	39
			3 消防
※41	輸送	輸送	39
			1 輸便
※42	輸送	輸送	36
			2 電話
※43	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※44	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※45	輸送	輸送	39
			3 消防
※46	輸送	輸送	39
			1 輸便
※47	輸送	輸送	36
			2 電話
※48	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※49	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※50	輸送	輸送	39
			3 消防
※51	輸送	輸送	39
			1 輸便
※52	輸送	輸送	36
			2 電話
※53	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※54	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※55	輸送	輸送	39
			3 消防
※56	輸送	輸送	39
			1 輸便
※57	輸送	輸送	36
			2 電話
※58	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※59	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※60	輸送	輸送	39
			3 消防
※61	輸送	輸送	39
			1 輸便
※62	輸送	輸送	36
			2 電話
※63	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※64	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※65	輸送	輸送	39
			3 消防
※66	輸送	輸送	39
			1 輸便
※67	輸送	輸送	36
			2 電話
※68	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※69	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※70	輸送	輸送	39
			3 消防
※71	輸送	輸送	39
			1 輸便
※72	輸送	輸送	36
			2 電話
※73	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※74	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※75	輸送	輸送	39
			3 消防
※76	輸送	輸送	39
			1 輸便
※77	輸送	輸送	36
			2 電話
※78	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※79	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※80	輸送	輸送	39
			3 消防
※81	輸送	輸送	39
			1 輸便
※82	輸送	輸送	36
			2 電話
※83	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※84	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※85	輸送	輸送	39
			3 消防
※86	輸送	輸送	39
			1 輸便
※87	輸送	輸送	36
			2 電話
※88	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※89	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※90	輸送	輸送	39
			3 消防
※91	輸送	輸送	39
			1 輸便
※92	輸送	輸送	36
			2 電話
※93	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※94	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※95	輸送	輸送	39
			3 消防
※96	輸送	輸送	39
			1 輸便
※97	輸送	輸送	36
			2 電話
※98	輸送	輸送	36
			1 守衛及夜警
※99	輸送	輸送	36
			2 警備と衛生
※100	輸送	輸送	39
			3 消防

注：久留米市役所 (1932) 313-335頁ならびに、全国発明品博覧会 (1918) をもとに作成した。

二十日まで開催されたる、全国発明品博覧会に関する事項の梗概を記述し以て後日の記念とせんとする」ために編まれたものであった。

この両者を比較すると、久留米市役所（1933）は全国発明品博覧会（1918）の記事の一部を資料復刻して転載したものであることが分かる。久留米市役所（1933）に記載された資料復刻と、全国発明品博覧会（1918）の記事内容とを比較対照したものが、表1である。表1では、久留米市役所（1933）でなされた資料復刻をAとして、全国発明品博覧会（1918）の記事内容をBとして分類した。

それではまず表1のBの目次に着目すると、全国発明品博覧会（1918）は、全19章から構成されており、記事内容に沿って細かく章と、さらに各章には節が設けられ、それぞれの章と節にはタイトルが付けられていたことが分かる。

一方で、表1のAの目次を概観するとBと比較して、大雑把な記事内容の構成となっていることが確認できる。

ここからは、表1に基づいて久留米市役所（1933）つまりAでなされた資料復刻が、全国発明品博覧会（1918）つまりBからどのように一部を抜粋して構成されたのか、具体的に確認していこう。

例えば、表1Bの第1章に着目すると、第1章のタイトルは「総論」となっており、この「総論」は第1節の「沿革」と第2節の「趣旨」とで構成されていた。一方で、表1Aを見ていくと、「総論」という章は存在せず、単に「沿革」（備考欄※1）と「趣旨」（備考欄※2）という記事名で、資料復刻がなされていたことが確認できる。そして、「沿革」（備考欄※1）については、Bの記事内容がそのまま復刻されているが、「趣旨」（備考欄※2）の記事については、Bに記載された一部の内容のみがAに資料復刻されていたことも確認できる。

つまり、Aでは、Bの第1章「総論」の第1節「沿革」と、第2節「趣旨」の一部の記事が資料復刻されていたのであった。詳しくは後述するが、この第2節「趣旨」には、久留米発明博の開催に先んじて行われた出品物を集めるための勸

誘活動の際に、全国に配布された趣旨書の一部が転載された¹⁰。

次に、表1Bの第2章に着目してみよう。目次のみに着目すると、第2章のタイトルは「規則」であり、この章には、細分化された節は設けられてはいない。Bの第2章は、「趣旨書を発表すると同時に」配布された久留米発明博の「各種の規程、即ち博覧会規則、出品規則、即売品取扱所規程等」について記述した内容となっている¹¹。第2章「規則」は、6-9頁の紙面が割かれ、第1条から第32条からなる久留米発明博の規則と、第1条から第9条からなる「即売品扱所規程」並びに、各種の申請書や契約書などの書式や規程、「観覧人心得」などが記載された。

では、ここで表1Aに着目していこう。Aの資料復刻でBの第2章に該当するのは、Aの備考欄※3と示した部分である。両者を比較すると、久留米発明博の規程がAには第23条までしか記載がされておらず、第24条から第32条にかけてが欠損していることが確認できる。加えて、AにはBには記載されている「即売品扱所規定」以降の記事がなく、各種の申請書や契約書などの書式に関する記事や、「観覧人心得」などについても捨象されていることが確認できる。ここからも、Aの資料復刻においては、Bの第2章の記事が大幅に捨象されていたことがわかる。

続いて、表1Bの第3章に着目する。第3章のタイトルは「役員」であり、節は設けられていない。Bをみると、第3章は9-12頁にかけて、総裁や副総裁を筆頭として、審査官や審査員、監督や顧問などの役職と氏名が記載された名簿になっている。そしてこれらに次いで、庶務部や出品部などに代表される各部局の部長や幹事などについても名簿が作成されている。

ここで、表1Aを確認しておこう。Aの資料復刻でBの第3章に該当するのは、表1Aの備考欄で※4と示した部分である。両者を比較すると、Aでなされた資料復刻にも「役員」の項目が設けられていたことが分かる。しかし、その内容を

¹⁰ 全国発明品博覧会（1918）、1頁。

¹¹ 全国発明品博覧会（1918）、2頁。

Bに書かれた記事と比較すると、「庶務部」以降の9 - 12頁部分にわたる記事情報の一切合切が捨象されており、明らかに情報不足であることが確認できる。

なお表1から明らかであるように、Bの第4章の「庶務及事務分掌」並びに同章第1節の「処務規定」に関しては、Aでは、触れられてすらいない。

さらに第5章についても、確認していこう。表1Bをみると、第5章のタイトルは「土地と建物」であり、この章は第1節「土地」と第2節「建物」で構成されていることが分かる。

一方で、表1Aをみていくと、「土地」と「建物」が別個の記事でまとめられていたことが確認できる。実際に書かれた両者の内容を比較すると、「土地」の項目は、小題は一致しているが、記載されている文面や内容がそれぞれ異なっており、かつBに比べてAの内容が希薄であった。

加えて、「建物」の記事に関してであるが、まず両者の一番大きな差異を指摘しておく、Bに記載されている別図が、Aには掲載されていないことが挙げられる。そして、記載がある記事についても、AとBで文面の違いがあるほか、Aの内容がBよりも希薄であることが確認できる。

続く第6章「徽章」については、表1BとAを見比べてわかるように、Aにおいては完全に捨象されている。

次に、表1Bの第7章を確認していこう。第7章のタイトルは「出品」であり、この章は第1節「出品勧誘」、第2節「出品人員及数量」、第3節「出品の売約、即売」、第4節「出品の看守」の計4節で構成されている。

一方で、表1Aに目を転じると、Bの第7章と関連する記事は、「出品勧誘」（備考欄※5）のみであったことが分かる。このAの「出品勧誘」は、Bの第1節「出品勧誘」と第2節「出品人員及数量」とに書かれていることを抜粋して要約したものであり、文面を見ると両者に記載されている内容が若干異なっている部分があることも確認できた。なお、AにはBの第3節と第4節に関する記述は見当た

らない。

続いて、表1Bの第8章をみていこう。第8章のタイトルは「第二会場」であり、この章は第1節「各省の出品」と第2節「教育品と洋画」の2節から構成されている。表1Aには、「第二会場」という項目は見当たらないが、「各省の出品」（備考欄※6）並びに「教育品と洋画」（備考欄※7）というタイトルが確認できる。この内、後者については表1の「AとBの比較」という項目に記述した通り、AとBとで完全に文章が一致していることが確認できた。しかし、前者については資料復刻されている内容が、ほぼBに記載されていることと一致しているが、細部に異なる点もあることが確認できる。

次に表1Bの第9章をみていこう。第9章のタイトルは「装飾」であり、この章は第1節「館外の装飾」と第2章「館内の装飾」の2節からなっている。表1Aを見ると、「館外の装飾」（備考欄※8）と「館内の装飾」という記事があることが確認できる。両者の内容を確認しておくと、Aの「館外の装飾」は、Bの記事と概ね一致しているが、一部に省略されていることが確認できる。「館内の装飾」については、両者の記事は細部まで完全に一致している。

続く第10章のタイトルは、「審査及褒章」となっている（表1B）。この章は、第1節「審査の概況」（備考欄※9）と第2節「審査の結果」の2節で構成されている。このBの10章を資料復刻した部分は、表1Aでは「審査の概況」という小題が付されている箇所に該当している。その内容を見ていくと、表1の「AとBの比較」にも記述するように、Aでなされた資料復刻は、Bの「審査の概況」と「審査の結果」の両節の記事を要約したものであり、両者に記載されている文面には差異があることが確認出来た。

第11章についても確認しよう。第11章のタイトルは「儀式」であり、この章は第1節「開館式」、第2節「発明家表彰式と褒章授与式」、第3節「閉館式」の計3節で構成されている（表1B）。

片や表1Aを確認していくと、「開館式」（備考欄※10）、「表彰褒章授与式」、「閉館式」（備考欄※11）という小題が付いた記事が見受けられ、これが第11章の各節を資料復刻した記事であることが分かる。各節とその資料復刻を比較すると、まず「開館式」については、AはBの記事内容を大幅に縮小したものであり、AにはBの「開館式」19 - 21頁に記載されている「告示」や「祝辞」が、捨象されていることが確認できる。

次にBの第2節「発明家表彰式と褒章授与式」については、Aでは「表彰褒章授与式」と改変されており、そもそもタイトル自体が異なっていることが分かる。そして記事の内容についても大半が異なっており、AではBの22 - 29頁にかけての記事が捨象されている。そして「閉館式」については、Bの29 - 31頁にかけて記載された記事が、Aでは大幅に捨象されている。

続いて、表1を確認していくと、Bの第12章から第16章にかけて、Aでは全く触れられていないことが確認できる。ここで、このAから抜け落ちているBの記事内容に着目しておこう。

第12章のタイトルは「広告」で、この章は第1節「立札」と第2節「絵ビラ」で構成されている。第13章のタイトルは「運賃割引」で、この章は第1節「出品物の割引」と第2節「乗船乗車賃割引」からなっている。第14章のタイトルは「売店」であり、この章は第1節「実演即売」と第2節「普通売店」で構成されている。第15章のタイトルは「通信」であり、この章は第1節「郵便」と第2節「電話」で構成されている。第16章のタイトルは「取締」であり、この章は第1節「守衛及夜警」、第2節「警備と衛生」、第3節「消防」の計3節で構成されている。以上、合計5章がAにおいては資料復刻がなされず、一切合切が捨象されたのであった。

加えて、表1Aに「入場者」（備考欄※12）という項目があるが、この小題に近似するものは、今までの事例とは逆にBの章節のタイトルには存在しない項目であった。この入場者に関する出所に関しては、Aには記載されていないが、確

認したところBの第18章第2節「事業報告」にAと同様の記載があるため、この記事が資料復刻したものではないかと考えられる。

続いて、表1Bをみると、第17章のタイトルが「決算」であることが確認できる。この小題は、Aの方にも存在している（備考欄※13）。具体的な内容をみてみると、Aの記事内容はほぼBに記載されていることと一致しているが、記事の形態や内容の一部などに異なる点がある。

次に、表1Bの第18章「残務整理」（第1節「事業報告」・第2節「記念帖」）ならびに、第19章「協賛会」については、Aでは捨象されており資料復刻が全くなされていない。加えて、表1のAからはBにはない「生產品の宣伝」という項目があることも確認できる。

以上みてきた通り、Aでなされた資料復刻は、Bに記載された内容を要約したり、大幅に捨象して書かれたものが大半を占めている。そのため、この資料は一次資料として取り扱い難いものであるといえる。逆にAでなされた資料復刻の大元であるBは、久留米発明博についての一次資料である。そのため、本稿で当該博覧会の分析を行っていく際には、一次資料の全国発明品博覧会（1918）をもとに検証を進めていくこととなる。

もう1つここで付け加えておきたいのは、Aに掲載された資料復刻において捨象されたのは、Bのどのような内容の記事であるのかということにも注目する必要があるということである。このことに着目するということは、Bが執筆された1918年の段階において重視されていたことと、Aが編集された1933年時点で重視されたことがどのように異なっていたか検証することにつながっている。この件に関しては、別稿を準備中である。

2. 久留米発明博開催の経緯

—第一次世界大戦と農商務省による発明品の奨励—

「はじめに」でも述べたように、久留米発明博は1918年4月15日から5月20日にかけて¹²、久留米市南薫西町の元三井高等小学校跡地を中心として開催された¹³。当時の久留米市とその周辺については、地図1が詳しい。

ここではまず、①久留米発明博はどのような趣旨を持つ博覧会であり、なぜこの時期に開催されたのか。②そして、それは実際にどのような経緯をもって開催されるにいたったのかについて、全国発明品博覧会（1918）をもとに考察していく。

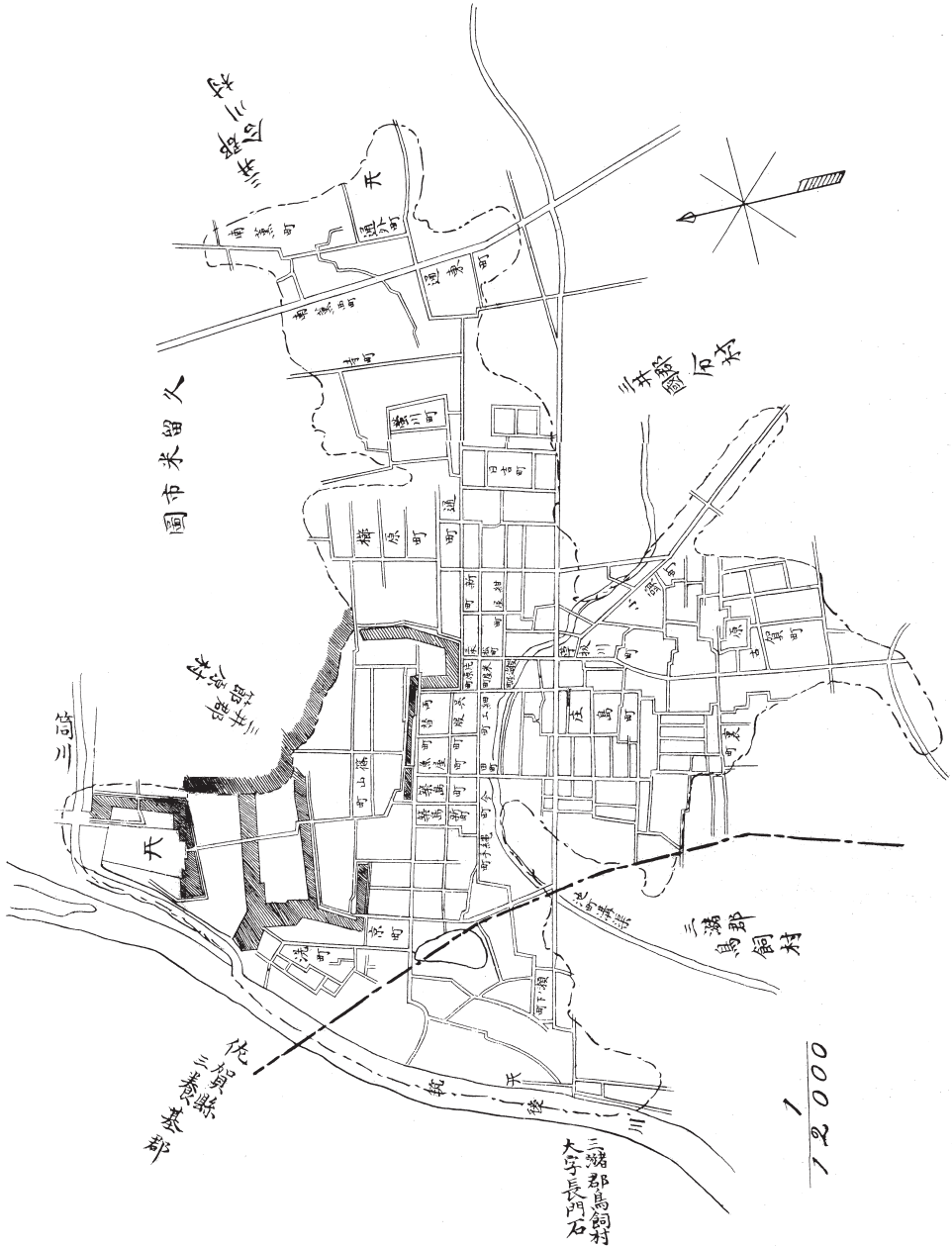
では、①の久留米発明博がどのような趣旨で開催されたのかという点についてであるが、資料中にある同博覧会の「趣旨」をまず確認していこう。全国発明品博覧会（1918）を確認すると、「欧州戦乱の一たび突発するや、経済界に及せる影響極めて甚大にして、殊に各種工芸の上には驚くべき進歩発展を来し（1頁）」などの記述が確認できる。ここでいわれている「欧州大戦」は、1914年に勃発し1918年11月まで続いた第一次世界大戦のことである。

ここから、工芸の発展に第一次世界大戦が大きく影響したことが、同時代的にも広く認識されていたことがうかがえる。加えて、第一次世界大戦の影響を受けて「発明界は、空前の盛況」を迎えており、また発明が活発になったことで「殆ど今次の戦争は、発明の戦争たる感」を示しているということに言及されている¹⁴。

12 全国発明品博覧会（1918）、「凡例」。

13 全国発明品博覧会（1918）、13頁。

14 全国発明品博覧会（1918）、1頁。



地図1 久留米市是調査委員会編 (1907)、付図

つまり、第一次世界大戦を受けて発明ブームが起こったことが指摘されているのである。周知のごとくこの時期は、大戦ブームを受けて重工業化が進展したことにより、日本経済が飛躍的に成長した時期に当たっている¹⁵。発明ブームは、この大戦ブームの中で起こっていたのであった。

それでは、ここで久留米発明博が開催された時期に着目しておこう。久留米発明博の開催は1918年4月からであるため、同博覧会の準備期間も鑑みると、この年月よりも、さらに前の段階で企画されていたことは明白である。ゆえに、この博覧会は第一次世界大戦期の真っ只中に企画され、開催に至ったものであったことが分かる。見方を変えれば、発明ブームが起きている最中に企画され開催された博覧会でもあった。ここで、当該期になぜ人々の興味関心が発明に向かっていたのかについても、考察しておこう。

そのためにはまず、第一次世界大戦がどのような意味を持つ戦争であったのかについて確認しておく必要がある。本稿は、戦史研究を主体とするものではないので、戦争史としての第一次世界大戦についての詳述は割愛するが、第一次世界大戦はそれまでの国家間の闘争の在り方が大きく変容した戦争であった。それはどういうことであるかという、第一次世界大戦が、人類が初めて経験した長期間にわたる多大な消耗を伴う国家総力戦であったということである¹⁶。

ここで最も注意を払わなければならないのは、国家総力戦がどのような形態をとる戦争であったかということである。エーリッヒ・ルーデンドルフ（1938）によると、国家総力戦の本質は「参戦諸国の軍隊が互いに対手の殲滅に努力したのみでなく、国民自身が戦争実行の仕事に引入れられ、戦争は又彼ら自身にも向けられ（7頁）」るよう変化したことに、見出されている。この変化は、国家の人的・物的諸力ならびに政治力などが、戦争を遂行するために動員されることとなっ

¹⁵ 三和良一（2002）、91 - 93頁。

¹⁶ 土屋喬雄（1943）、186 - 196頁。

たことを意味していた¹⁷。

そして、財政上の処置を含む国家経済の在り様と同様に¹⁸、軍需工業のみならず一般工業にも及ぶ技術力や生産能力に関わる産業全体の在り様も変容し、国家総力戦を遂行する上で欠けてはならない重要な経済的主体となったのであった¹⁹。

端的にいえば国家総力戦は、読んで字の如く国家の総てをにかけて戦争を行う体制のことなのである。そして、戦争に資する「国家の総て」とは、文字通り国家の総てであり、そこには国民・思想・政治・経済・技術・輸送力など在りとしあらゆるものが含まれていたのであった。

瀧瀬厚によると、国家総力戦の内容とその特質は、①武力戦の性格変化、②経済・工業動員の比重の増大、③思想・精神の動員の必要性の3つに要約できると定義されている²⁰。ここではこれらの内、とくに②の経済・工業動員の比重の増大というトピックに着目しておきたい。

なぜなら、総力戦は巨大な軍需品消耗の上に戦われるという性格を有し、巨大な軍需生産能力の不断の拡充と表裏一体の関係にあるために、軍需品の生産能力が勝敗を左右する決定的な要素となっていたからである²¹。総力戦段階においては、軍需品生産能力の多寡こそが戦争の行方を支配するようになっていったのであった。そして、これらの生産能力は戦争の遂行に傾注され、製造された製品も大量に消費されていくこととなっていた。

このことは、経済や産業あるいは科学や技術といった視角から捉えれば、国家の経済や産業やそれらの根底にある科学力や技術力を、戦争という消耗行為に総

17 エーリッヒ・ルーデンドルフ（1938）、17 - 22頁。

18 エーリッヒ・ルーデンドルフ（1938）、61 - 63頁。

19 エーリッヒ・ルーデンドルフ（1938）、84 - 85頁。

20 瀧瀬厚（2010）、22頁。

21 瀧瀬厚（2010）、24頁。

動員するということを意味している。つまり、戦争で消耗するものを科学力や技術力を含む国家の持ち得る総てをフル動員して生産・製造し、戦争に伴う消耗のブラックホールに傾注していくのが、国家総力戦体制である。

このため、兵の練度や戦術などといった直接的な戦闘に必要となる技能だけではなく、国力を構成するあらゆるものや力の格差が、戦力格差として戦争の結果に直接的・間接的に影響していくこととなっていく。このことは、あらゆる国家の存亡にその国家の産業や経済、あるいはそれらを支える技術力や科学の発展が大きく影響し、関係していくことを意味していた。

つまり、久留米発明博の開催趣旨にも書かれているように、科学力や技術力を以て発明された産品が、戦争の趨勢に甚大な影響を与え得るものとして捉られるようになっていたのである。例えば、第一次世界大戦においては、戦車や潜水艦、航空機などといったものが新しく兵器として実戦投入され、加えて新しく登場した毒ガスや有用性が認められた機関銃などといった化学兵器や自動火器類も戦闘に用いられるようになった²²。

これらはいずれも、第一次世界大戦という舞台に初めて投入されたものであり、新たな技術によって構築された発明品であった。そして、結果としてこれらの発明品が戦争と呼ばれる、国際政治の終局的な外交局面の表出形態を変貌させた。科学や技術力の粋として誕生したマテリアルが、政治や外交の最終局面として表出される国家間の正面衝突の在り方、ひいては世界の在り方を一変させたのである。

このように、久留米発明博が開催されることとなっていく背景には、第一次世界大戦における戦争遂行形態の変化に伴った、経済・産業的な急激な変容という歴史的な奔流が存在していた。そして歴史学者の筆耕を俟つまでもなく、新たに発明された兵器が戦闘の帰趨を握ったということは同時代的に周知され、こ

22 長谷川正道（1944）、25 - 28頁。化学兵器については、箕作秋吉（1932）、11 - 17頁を参照した。

のこと事体が、新たにより有用なものを発明せねばという焦燥とともに、日本社会の中でも広がりを見せることとなっていた。こうして、発明品ブームは払暁を迎えたのであった。

このような世相の中で、企画され開催される運びとなったのが、久留米発明博であった。久留米市で開催された博覧会が発明博であったことは、欧州戦線において新しい発明品が実戦投入され、戦争の帰趨を大きく変化させていくことを進行形で耳目にする世相において、ある種必然的なことであったともいえる。

次に久留米発明博が開催された経緯を確認していこう。

大正年間において、久留米市には「幾多の工業」が存在し、将来的にこれらの第二次産業が発展していく余地は大きくあるという風に判断されていた²³。加えて、第一次世界大戦を受けた発明ブームによって、久留米市においても「発明思想を養成して時勢の進運に順応する」必要があるとの意識が昂じていた²⁴。

これを受けて久留米市では、市議会内（資料用語・歴史用語としては「市会」であるが、論文の読み易さのために、本稿では「市議会」と表記する…執筆者注）に勸業調査委員会を設けて、種々の商工業の発展策を協議していた。この一環として、「発明品博覧会開催の議」がその俎上に上ったのであった。

久留米市において発明博の開催が企図された背景には、国家の発明品奨励事業もまた存在していた。ここで、そのことについても言及しておこう。

農商務省は、1917年10月に「大正6年農商務省令第28号」を以て「発明品奨励規程（以下、単に「奨励規定」と略述する…執筆者注）」を發布し、これによって発明品の普及や展覧に補助金が交付される旨が提示された²⁵。国策として、発明品が奨励されるようになったのである。「奨励規定」の第1条では、「優良なる

23 全国発明品博覧会（1918）、1頁。

24 全国発明品博覧会（1918）、1頁。

25 農商務省（1917）、297頁。

発明を誘掖奨励する為本則の定る所に依り毎年予算の範囲内に於て発明奨励費を交付す」ることが定められた²⁶。

続く第2条では、奨励費を交付する事項が決められていた。それは、①有益な発明の見本制作ならびに試験、②発明に関する共進会の開催、③発明に関する講演会の開催、④発明の懸賞募集、⑤発明の表彰、⑥発明に関する研究室の設置、⑦道府県への発明品陳列所の設置と陳列、⑧その他農商務省大臣が発明に必要と認めたる事項の計8項目であった²⁷。

久留米市は、この1917年から始まった制度を利用して、同市内で発明博を開催しようと企図したのであった。久留米市は、農商務省や当時予算審議中であった福岡県などに掛け合い、その結果政府と福岡県の両方から支援を得ることに成功した²⁸。

これにより、久留米市議会において「全国発明品博覧会開設の議」が決められ、当初は市役所内に事務局が設けられた。この後、1918年1月11日に事務局が設けられ、東京市麴町区道三町にある特許局陳列館内にも東京事務局が新設され、久留米発明博への全国的な出品勧誘がなされるようになった²⁹。この時、出品物として募られたのは、もちろん各種の発明品であった。こうして、久留米発明博の開催に向けて大々的に舵が切られることとなった。

久留米発明博の開催に先立ち、久留米市の側は次々と博覧会に関する各種の規則や規定を定めていった。この規則や規程は、Ⅰ．博覧会規則、Ⅱ．出品規則、Ⅲ．即売品扱所規程の3つに大別されていた³⁰。

ではまず、Ⅰ．博覧会規則について確認していこう。「博覧会規則」は、第1条から第23条に及ぶもので、その内容はイ．総則（第1条～第3条）、ロ．

26 米田英夫・高島宗三（1923）、230頁。

27 米田英夫・高島宗三（1923）、230頁。

28 全国発明品博覧会（1918）、1頁。

29 全国発明品博覧会（1918）、1頁。

30 全国発明品博覧会（1918）、2頁。

組織（第4条～第7条）、ハ．審査（第8条～第10条）、ニ．職務権限（第11条～第23条）に分けられていた。

まず、イ．総則を見ていくと、第1条で「本会（全国発明品博覧会…執筆者注）は発明の奨励並に其普及を計り併て地方産業の発達に資する為め汎く発明品を蒐集陳列し以て公衆の観覧に供す」ことが明言されていた³¹。続く第2条では、会の正式名称である「全国発明品博覧会」が、第3条ではその博覧会の開催場所と開催期間が明示された³²。

続いて、ロ．組織においては、博覧会組織の役職が定められた³³。表2-1は、博覧会を運営する組織の役職についてまとめたものである。表2-1によると、久留米発明博の役職としては、総裁・副総裁が各1名ずつ、名誉顧問・委員が若干名、監督1名などのポストが用意されており、これらの職に就任する人物は、

表2 久留米発明博の組織

表2-1 役職一覧

役職	人員	備考
会長	1	久留米市長
副会長	2	久留米市議会議長・商業会議所会頭
事務総長	1	
常任理事	2	内1名 有給
常務委員	若干名	
委員	若干名	
評議員	若干名	
総裁	1	
副総裁	1	
名誉顧問	若干名	
名誉委員	若干名	

表2-2 審査関係

役職	人員	備考
審査総長	1	
審査員	若干名	

注：全国発明品博覧会（1918）、2頁をもとに作成。

31 全国発明品博覧会（1918）、2頁。

32 全国発明品博覧会（1918）、2頁。

33 全国発明品博覧会（1918）、2頁。

評議員の諮詢を経た後に、会長が依嘱することが定められていた（第4条）。これらの役職に加えて、会長1名、副会長2名、事務総長1名、常任理事2名（内1名有給）、常務委員・委員・評議員が若干名配置されていた（第5条）。

この内、会長は久留米市長が、副会長は久留米市議会の議長ならびに久留米商業会議所会頭が務めることが定められた（第6条）。それ以外の役員については、会長と副会長の合議によって定められた（第7条）。この点に関しては、次節においてさらに詳述する。

加えて、出品された物品の審査体制については、ハ．審査によって詳細な取り決めがなされていた³⁴。この出品審査に関する役職をまとめた表が、表2-2である。表2-2によると、出品審査に関しては、規則に基づいて審査総長1名と審査員若干名が置かれた（第8条）。これらの役職は、総裁の裁可を経たうえで、会長が依嘱することが定められていた（第9条）。加えて審査総長は、審査規程を設ける責を担った（第10条）。なお同博覧会への出品については、Ⅱ．出品規則とも関連したテーマであるため、後述する。

次に、ニ．職務権限では、各役職者の職務権限と、久留米発明博を行うための事務組織に関しての規程について定められている³⁵。具体的には、総裁が本会を統括すること（第11条）、会長が会の事務を総括して博覧会の代表となること（第13条）などが定められていた。加えて事務組織も、庶務部・出品部・工務部・経営部・会計部が設けられ、それぞれの分掌事項について細かな説明が付けられた（第21条～第23条）。

ここで、Ⅱ．出品規則について確認していこう。「出品規則」は、第1条から第32条に及ぶもので、イ．総則（第1条～第5条）、ロ．出品（第6条～第25条）、ハ．区画及使用料（第26条）、ニ．審査（第27条～第32条）に分けられていた³⁶。

34 全国発明品博覧会（1918）、2頁。

35 全国発明品博覧会（1918）、2-3頁。

36 全国発明品博覧会（1918）、3-6頁。

イ．総則を確認すると、久留米発明博への出品は、特許品、実用新案品、登録意匠品、登録商標のある商品に限られていた（第1条・第5条）。これに加えて、海外の特許登録を済ませた物品で、参考品として有益なものも出品の対象となっていた（第2条）。ただし、発火や爆発の恐れがあるものや、風俗や衛生に害をなすものなどの出品は許可されておらず（第4条）、会場の安全や衛生管理には十分な注意が図られていたといえる。

ロ．出品に関しては、段階に応じて提出が必要となる書類の様式や、書類の提出期限などが事細かに決められていた（第6条・第7条・第8条）。加えて、久留米発明博において、出品者が出品した展示物を即売したい場合は、同会が指定する即売品扱所規則に基づいて供託する契約を結ぶことが定められており（第17条）、出品者が展示物を勝手に売約できないように規則が設けられていた（第18条）。さらに、出品者が出品された展示物を規則に基づいて売約した場合、売上手数料として売上金の5%を博覧会へ納付することも定められていた（第20条）。ここで注目すべきは、利益金の5%ではなく、売上金の5%が納付額として定められていたことである。この他にも、出品された展示物の会場内での取扱や、展示方法などの詳細が定められていた。

ハ．区画及使用料では、出品するジャンルによって、出品された展示物を陳列する区画の面積、会費や「場代」と呼ばれる会場の使用料が事細かに決められていたことが看取できる（第26条）。例えば、普通出品の場合は1区画につき会費として3円、自営出品の場合は1区画につき15円の場代を払わなければならなかった。

ニ．審査では、出品物が審査されその結果によって、大賞・金牌・銀牌・銅牌・褒状・謝状が授与される旨が定められていた（第30条）。

Ⅲ．即売品扱所規程は、第1条から第9条からなる規程であった³⁷。即売品扱

³⁷ 全国発明品博覧会（1918）、6頁。

所では、久留米発明博に出品された展示物と同一の商品を購入することが可能であった（第1条）。先述したように、博覧会の展示品は会場内で直接売買することは禁止されていたため、出品された展示物の売買は、この即売品扱所を通してのみしか認可されていなかった。

加えて、展示された物と同様の商品も即売品扱所を介して販売することも可能であった。しかし、その場合も出品者は、即売品取扱所に加入する必要がある、加入に当たっては設備費として2円を支払う必要があった（第3条）。そして、それらの商品は即売品として取扱われ、その売上高の1割を手数料として、博覧会に収める必要があった（第5条）。

以上みてきたようにソフト面においては、ルールや規定などが策定されつつ、ハード面においては開催地の選定が進められた。当初、候補地としては3、4か所の土地が挙げられていたが、最終的に開催地に選ばれたのは、既述の如く久留米市の東方に位置する三井郡南薫西町（現・久留米市南薫町）の元三井高等小学校跡の空き地と、その周辺エリアであった（地図参照）³⁸。

そのため、博覧会を開催するにあたっては、先ずこの土地の共同所収者である三井郡節原村外7カ村との間に、土地の借入をめぐる交渉を行う必要があった。協議の結果、南薫西町の元三井高等小学校跡地と、南薫尋常小学校の土地の一部が借りられることが決定し、1918年1月23日から土地の造成と、建物の建築に着手される運びとなったのであった。

3. 久留米発明博の開催を推進した担い手たち

さて、久留米発明博の開催を推進した担い手たちは、どのような人々だったの

38 全国発明品博覧会（1918）、13頁。

であろうか。これに関しては大別すると、前節で概観した規則によって定められて組織された博覧会の役員と³⁹、協賛会の構成員が中心的な存在であった⁴⁰。本節では、博覧会を運営した組織とその人的構成について、焦点を当てていくことになる。

まず、久留米発明博を開催するにあたって、この博覧会を運営するために設けられた組織と、その人的構成について注目しておこう。

久留米発明博の役員選出については、前節で確認した通り「博覧会規則」において定められていた。この規則によって作られた主な役職や役員をまとめたものが表3である。表3を見ていくと、久留米発明博の総裁には阪谷芳郎が、副総裁には久米金弥が就任していた。総裁を務めた阪谷芳郎は、岡山出身の大蔵官僚で、1906年から1908年まで大蔵大臣を務めた後、久留米発明博開催時には貴族院議員（男爵議員）に在職中であった⁴¹。

副総裁の久米金弥は、東京府出身の通信官僚であったが⁴²、後に農商務省に移り1903年から1905年まで特許局長を務め、1907年には農商務次官となった略歴を持っている⁴³。久米金弥は特許局長時代、当時農商務省大臣であった清浦奎吾らと共に、帝国発明協会を組織した人物でもあり、発明品に関する造詣が深かった⁴⁴。

なお、久留米発明博の総裁と副総裁の人事をめぐるのは、清浦奎吾が「人選其他重要事項に付懇篤なる」援助を行ったという記述がある⁴⁵。このことから分

39 全国発明品博覧会（1918）、9 - 12頁。

40 全国発明品博覧会（1918）、41 - 43頁。

41 秦郁彦（2002）、238頁。阪谷芳郎に関しては、様々な分野から研究蓄積が進められている。昨今の研究としては、例えば代表的なものとして、永江雅和（2014）、西尾林太郎（2019）、西尾林太郎（2021）、瀬戸口龍一（2021）、竹本英代（2023）などが挙げられる。

42 『人事興信録データベース』（名古屋大学）<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who1-1865>、閲覧日2023.05.23。

43 秦郁彦（2001）、114 - 115頁。

44 七字魁（1924）、1頁。

45 全国発明品博覧会（1918）、9頁。清浦奎吾は、後に第23代総理大臣となった人物である。

1918年の全国発明品博覧会に関する分析（西尾）

表 3 久留米発明博役員

役職	氏名	備考	役職	氏名	備考
総裁	阪谷芳郎	法学博士男爵	会長	石津和風	
副総裁	久米金弥		副会長兼事務総長	中川喜次郎	
審査総長	服部鹿次郎	工学博士	副会長兼事務総長	長濱八百香	
審査官	岡部忠敏	特許局技師	常任理事	田村和六	
	小林来三	特許局技師		今村秀夫	
審査員	小山十一郎	福岡県工業技師	庶務部長	田村和六	
	篠崎仙太郎	福岡県工業技師	出品部長	今村秀夫	
	内野豊吉	福岡県工業技師	工務部長	永松百太郎	
	毛利万太郎	農事試験場技師	第二会場経営部長	中垣英次	
	清永徳松	福岡工業学校教諭	会計部長	小林哲	
	竹下俊夫	小倉工業学校教諭	評議員	複数名	
監督	殿木善之助	農商務省特許局囑託	名誉委員	複数名	
名誉顧問	有馬頼寧				
	谷口留五郎				
	川越壮介				
顧問	久保豊四郎				
	城島春次郎				
	三条榮三郎				
	猪野鹿次				
	戸川槌次郎				
	都留正秀				
	佐藤寿一郎				
	堀善之丞				
	川端久五郎				
	巖谷忠順				
	林田守隆				
	若林卓爾				
	細見保				
	国武金太郎				

注：全国発明品博覧会（1918），9 - 12頁をもとに作成。

評議員ならびに名誉委員の氏名は省略しているが，評議員76名，名誉委員87名であった。

かるように、農商務省、中でも特に特許局の影響が特に強い博覧会であったといえる。

続いて表 3 をみていくと、審査総長には九州帝国大学の創設にかかわった工学

博士の服部鹿次郎が選出されていた⁴⁶。審査官には、特許局の技師である岡部忠敏と小林来三が就任した。この時期の特許局は、農商務省の外局であるため、この技師2名は農商務省系の技術官僚であったといえる。

審査員には、福岡県工業技師である小山十一郎と篠崎仙太郎、同技手である内野豊吉、農事試験場技師である毛利万太郎、福岡工業学校教諭の清永徳松、小倉工業学校の竹下俊夫が就任した。監督には、農商務省特許局嘱託である殿木善之助が就任していた。

ここからも久留米発明博が、農商務省のなかでも特に特許局の影響を大きく受けた博覧会であったことが分かる。換言すると、農商務省が奨励した発明品政策の表出の1つとして、この久留米発明博を位置づけることができるのである。

表3の名誉顧問や顧問に就任した人物たちにも着目しておこう。まず名誉顧問の氏名を見ていくと、久留米藩祖より数えて第14代目に当たる有馬頼寧も名を連ねている。この有馬頼寧もまた、農商務省官僚の経験を持つ人物であった⁴⁷。谷口留五郎は、奈良県出身の内務官僚で、当時は福岡県知事に在職中であった⁴⁸。川越壮介は、鹿児島県出身の内務官僚であった⁴⁹。

次に顧問の欄に目を転じよう。久保豊四郎は、富山県出身の内務官僚であった⁵⁰。三条榮三郎は、福岡県で建築関係の技師の職にあった人物であった⁵¹。猪野鹿次は、福岡県出身者であり、大正年間には福岡県築上郡長（1913年）、同県三井郡長（1916年）、同県筑紫郡長（1920年）などの職に就いた経歴を有した⁵²。

46 『人事興信録データベース』（名古屋大学）<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-1311>、閲覧日2023.05.20、23:17。

47 篠原正一（1981）、56頁。

48 『人事興信録データベース』（名古屋大学）<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-5401>、閲覧日2023.05.23。

49 『人事興信録データベース』（名古屋大学）<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-4190>、閲覧日2023.05.23。

50 秦郁彦（2001）、196頁。

51 三条榮三郎（1931）、10頁。

52 帝国自治協会（1938）、69頁。

戸川槌次郎に関しては、1912年時点で文官高等官試験に合格し高等官八等となり福岡県事務官補に任ぜられていることから、内務官僚となったことが分かる⁵³。そして戸川槌次郎が、七級報を下賜されたことも確認できる⁵⁴。川端久五郎は、1911年時点で福岡県京都郡長を務めた人物であることが確認できる⁵⁵。巖谷忠順は福岡県出身で、1917年から1921年の間に初代大牟田市長を務めた人物であった⁵⁶。

続けて見ていくと、林田守隆は明治期に久留米市の近在で製糸業を営んだ人物で、旧藩士の授産工場である赤松社が紛乱した際には社長に就任し、断交改革を行いその基礎を確立するなどの貢献を果たした。経済界的には、1901年に緑綬褒章を授与されて以来、旧藩主有馬伯爵家顧問、久留米銀行取締役頭取、久留米商業会議所会頭などに押された人物である⁵⁷。若林卓爾は莊島町生まれで後に、第5代久留米市長（1916年12月退職）に就任し、瓦斯事業の市営化・勸業共進会の開催を推進した立役者であった⁵⁸。細見保は京町生まれの人物で、久留米の教育界をリードした存在であり、有馬家の家政相談役も務めた⁵⁹。

ここから、顧問には福岡県下などの自治体の長などを歴任した内務省系の官僚グループと、久留米市の実業家グループとが両方存在していたことが分かる。

同会の会長には、博覧会規則に基づいて、当時久留米市長を務めていた津津和風が就任し⁶⁰、副会長にはそれぞれ中川喜次郎と長濱八百香が就任した。中川喜次郎は、1874年三本松町出身で、家業は花簾・久留米傘（和傘）の販売業であり、

53 西園寺公望（1912）。

file:///C:/Users/nitro/AppData/Local/Temp/Temp1_2789479.zip/2789481.pdf、
閲覧日：2023.05.24。

54 大蔵省印刷局（1912）、433頁。

55 大蔵省印刷局（1911）、444頁。

56 歴代知事編纂会編（1985）、454頁。

57 篠原正一（1981）、402頁。

58 篠原正一（1981）、537頁。

59 篠原正一（1981）、432頁。

60 歴代知事編纂会編（1985）、447頁。篠原正一（1981）、84頁。

1915年9月より県議会議員（資料用語・歴史用語としては、「県会」であるが、論文の読み易さのために、本稿では「県議会」と表記する）、1917年5月より1931年9月まで久留米商業会議所会頭を務めた人物である⁶¹。長濱八百香は螢川町出身の弁護士で、1918年2月に久留米市に鳥飼村が合併したことにより久留米市議となった人物である⁶²。

常任理事には、田村和六と今村秀夫がそれぞれ就任し、田村和六は庶務部長を、今村秀夫は出品部長をそれぞれ兼任した（表3）。田村和六は、三井郡三国村三沢の庄屋で、九州日報久留米市局長・市議会議員・消防組頭として市政に参画し、久留米市魚市場株式会社専務取締役を務め、中央軌道会社の創立に尽力した⁶³。今村秀夫は久留米市田町生まれで、久留米実業界の前身組織である潜龍倶楽部の有力メンバーとして活躍し、市議会議員にもなった人物である。久留米実業界の運動で商業会議所が設置されて後は、書記長となり、1914年7月から1918年12月まで再び市議会議員を務めた⁶⁴。

工務部長を務めた永松百太郎は、『福岡県一円富豪家一覧表』にも記載されていることが確認でき、1900年時点で米屋町在住であり⁶⁵、生業は「金銭貸付業」を営んでいた⁶⁶。第二会場部長の中垣英次は、獣医で酪農業（乳牛）を営み、1917年時点では久留米市議会議員を務めた⁶⁷。なお、会計部長は小林哲が務めた。この他に、評議員と名誉委員の役職があり、これらの役職には後述する協賛会を組織していた久留米市経済界の関係者も複数名就任していた。

久留米発明博の運営組織には、総裁に第一次西園寺公望内閣で大蔵大臣を務め

61 篠原正一（1981）、365頁。

62 篠原正一（1981）、384頁。後の第9代市議会議長である。

63 篠原正一（1981）、320頁。

64 篠原正一（1981）、112頁。

65 土方新太郎（1901）、49頁。

66 武田令太郎編（1922）、144頁。

67 篠原正一（1981）、365頁。

た阪谷芳郎をトップに据え、副総裁には農商務省官僚で特許局長を務め、清浦奎吾と共に帝国発明協会を創設した久米金弥を据えた組織であった。その上で、出品物の審査や監督をする役割として、中央官僚である農商務省特許局の技師や福岡県の技師なども参画していた。

名誉顧問の役職をみていくと、農商務官僚を務めた有馬頼寧以外は、内務官僚であることも確認できる。顧問には、福岡県内の自治体の長経験を有する内務官僚グループと、久留米市の実業家が就任していた。会長以下常任理事の陣容を確認していくと、会長には久留米市長が、副会長には久留米市商業会議所会頭と市議会議員が就任し、常任理事には久留米の商工業に造詣の深い市議会議員が就任していたことが確認できる。

次に、久留米発明博を開催するにあたり組織された協賛会についても注目しておこう。この協賛会は、久留米発明博の協賛会、正式には全国発明品博覧会協賛会（以下では単に協賛会と略述する）である。協賛会は、「博覧会の当地に開催されんとするに当り、経営部を設けたりしが、後之を廃止して、新たに協賛会を組織すること」となり発足に至ったという⁶⁸。協賛会は、1918年1月24日に細工町青々館に事務所を設置していたが、久留米発明博の会場内に事務所および接待所が竣工されたため、同年4月にそちらへ移転した⁶⁹。なお本節において、協賛会の説明に関して特に注記のない場合の出典は、全国発明品博覧会（1918、41 - 43頁）による。

この協賛会を組織するに当たり、「市内有力の人々」を幹部とすることとなった⁷⁰。ここでは、その陣容を確認していくこととしよう。表4は、協賛会の幹部として紹介された人物の人名をまとめた表である。

68 全国発明品博覧会（1918）、41頁。

69 全国発明品博覧会（1918）、42頁。

70 全国発明品博覧会（1918）、41 - 42頁。

表4 協賛会の役職者

役職	氏名	備考
会長	国武金太郎	1874年10月、国武喜次郎の長男として出生。国武合名会社を組織し、久留米緋の製造販売に従事した。多年にわたり久留米緋同業組合長を務めた。1928年には久留米緋功労者として叙勲された。
副会長	本村亀太郎	1879年1月、本村庄平の子として出生。久留米緋や機の製造販売に従事した。本村家の三代目で、本村合名会社の社長を務めた。
	篠原倍蔵	1884年片原町生まれ。久留米商業学校卒業後、実業に従事し久留米実業界の発展に寄与した。藍胎漆器の製造販売を生業にしつつ、昭和期には商工会議所でも活躍し、デパート旭屋の創立にも奔走した。
幹事長	中野礼次郎	1882年5月荏島町生まれ。家業であった緋ならびに緋の織物業を継いだ後、筑後改良織物業組合を組織して緋や緋の改良に熱心に取り組んだ。大正年間には久留米市議会議員も務めた。
常任幹事	田中万平	三井郡小郡町の人で、1901年に通町3丁目に文房具和洋紙の卸売業を営む店を構えた。三井電気運輸株式会社取締役も務めた。大正期には久留米商業会議所議員として商工会に貢献した。
	湯浅寅之助	久留米緋・久留米緋商、三本松町に店舗を構え、各組合や商業会議所の要職も務めた。
	鶴俊太郎	瀬ノ下町で菓子製造業を営む鶴善助の息子。1900年に久留米商業学校卒業後、家業を助けた。善助の死後、鶴前製菓株式会社を引き継いだ。
	野村熊三郎	1871年久留米新町に出生。1908年に市議会議員となり、その後市政に尽くした。
	高尾正蔵	1877年4月善道寺村木塚生まれ。1895年大阪共立役学校を卒業後、家業の菓業を継ぎ、久留米進出を果たす。綿糸の染料である人造藍の有用性を科学的に証明し、輸入と流通を図った。三井電車の路線拡大や経営に尽力した。大正年間には市議会議員や商業会議所議員の役職も務めた。
	国武克己 倉田雲平	国武喜次郎の次男。 つちやたび合名会社の経営者。

※注1 役職と氏名については全国発明品博覧会（1918）、42頁をもとに作成した。

※注2 備考欄については、篠原正一（1981）、各頁をもとに作成した。

表4を見ていくと、協賛会の会長には、国武金太郎が就任していたことが確認できる。国武金太郎は、国武喜次郎の長男で久留米緋の製造過程の機械化に貢献した人物であり、国武合名会社を組織した⁷¹。国武金太郎の父である国武喜次郎は、久留米緋の製造と販売に従事し、全国に販売網を持つ近江商人とも提携して、久留米緋同業組合の前身組織を結成するなどの功績を残しつつ、久留米緋製造工場をも組織化していった人物であった⁷²。喜次郎の息子である国武金太郎は、久留米緋製造・販売業者に従事し、多年にわたって久留米緋同業組合長の役職を務めた⁷³。久留米緋業界における国武金太郎の最も大きな功績は、捲纏式緋糸製造

71 篠原正一（1981）、225 - 226頁。

72 篠原正一（1981）、224 - 225頁。

73 篠原正一（1981）、225 - 226頁。

機の発明に携わったことや、その発明された機械をもとに機械化された工場を設立し、その生産高を飛躍的に向上させたことにあった⁷⁴。

協賛会の副会長には、本村亀太郎と篠原倍蔵の名前が挙げられている。本村亀太郎は、本村庄平の子で本村家二代目、本村合名会社社長である⁷⁵。本村亀太郎の父である本村庄平についても説明しておこう。本村庄平は、通町生まれ、西南役に乗じて粗悪品を販売したために地に落ちた久留米緋の信用挽回や販売拡大に努力し、赤松社緋本村合資会社を組織するなどの活躍を見せた。親子の功績により、本村家と国武家とは留米緋業界の双璧と並び称せられた存在であった⁷⁶。

篠原倍蔵は片原町生まれで、久留米商業学校卒業後は、実業に従事し久留米実業界発展に尽力した人物である。潜龍倶楽部や後身組織である久留米実業界の中心的な存在であり、久留米藍胎漆器合資会社（久藍社）、1928年には久留米商工会議所の会頭も務めた⁷⁷。

ここから、協賛会の副会長職には、久留米緋関係から1名と、藍胎漆器関係から1名が就任していたことが看取できる。

幹事の中野礼次郎は、莊島町生まれで家業であった久留米緋および縞の織物業を継いだ人物である⁷⁸。明治期後半には、筑後改良織物組合を組織し、久留米緋・久留米縞の改良機運を盛り上げ、同製品の隆盛をもたらした。続く大正年間には、久留米市議会議員の職も務めていた。

常任幹事には、田中万平、湯浅寅之助、鶴俊太郎、野村熊三郎、高尾正蔵、国武克己、倉田雲平の合計7名が就任した。

田中万平は三井郡小郡町出身で、通町三丁目に開業した文房具・洋紙の販売

74 篠原正一（1981）、225 - 226頁。

75 篠原正一（1981）、489頁。

76 篠原正一（1981）、489頁。

77 篠原正一（1981）、284 - 285頁。

78 篠原正一（1981）、372頁。

業者であり、1915年から1925年までの間、久留米市商業会議所議員を務めた⁷⁹。湯浅寅之助は三本松町に店舗を構えた久留米絣・久留米縞商であり、各種の組合や商業会議所の要職に推挙された⁸⁰。鶴俊太郎は瀬ノ下町出身の菓子製造業を営む鶴善助の息子であり、1900年に久留米商業学校を卒業したのちに家業に就き、善助の死後には鶴善製菓会社の社長を引き継いだ⁸¹。野村熊三郎は1871年に久留米新町に出生し、後に市議会議員となった人物である⁸²。高尾正蔵は1877年に善道寺村に出生し、大阪共立薬学校卒業後に家業の薬業を継いだ。これと並行して、久留米絣用の人造藍を輸入し実用化させた人物である⁸³。国武克己は、喜次郎の次男で金太郎の弟である⁸⁴。倉田雲平は、周知のとおりつちやたびの社長である⁸⁵。

協賛会は、久留米絣関係者を中心として、藍胎漆器や製菓業、つちやたびなどの製造業者や、販売業者などの久留米市を代表する商工業の担い手たちが集っていた。そのほかに、市政に尽力した市議会議員も参加した組織であったことも確認できる。また、この協賛会のメンバーの多くが、従前の久留米発明博の運営組織にも、委員や評議として参加していた。

協賛会は、「市内実業家市会議員、商業会議所議員、各学校長、各官衙長、区長並びに筑後一同の市町村長、学校長等を幹事又は委員賛助員、特別賛助員に推薦し、以て着々其事業を進」展させていった。協賛会では、新聞紙発行条例に基づいて、1918年4月11日より『博覧会日報』を発刊し、久留米市を中心とした関係各所へ頒布するなどの活動がなされた。この『博覧会日報』は、久留米発明博

79 篠原正一（1981）、316頁。

80 篠原正一（1981）、511頁。

81 篠原正一（1981）、339頁。

82 篠原正一（1981）、395頁。

83 篠原正一（1981）、322頁。

84 篠原正一（1981）、226頁。

85 篠原正一（1981）、230頁。

が発明品を多く取り扱う性格を有する博覧会であったことをも鑑み、同博覧会の設備などについての詳しい説明を記載していたという。また、久留米発明博の開催に当たって、協賛会からは多額の寄付もなされていた。

本節を振り返っておこう。久留米発明博を推進した組織には、博覧会の運営組織と協賛会という2つの組織が存在していた。ここから、久留米発明博は、農商務省系や内務省系の中央官僚グループと、久留米市の政治や経済界の代表的な人材とを混成した組織によって、運営されていたことが分かる。この組織では、東京に立地する農商務省特許局内に出品事務所を設け、久留米発明博に展示される発明品を日本中から蒐集するなどの全国的な役割をも担っていた⁸⁶。

一方で協賛会は、久留米市の実業家グループが中心となって、博覧会の運営組織ではカバーしきれない、より地元に近い部分に注意を払い、久留米発明博の宣伝などを行う組織であった。このように、久留米発明博を組織面から分析すると、博覧会の運営組織と協賛会とで、全国⇄地方の双方向に対応できる分業体制が確立されていたことが確認できる。

4. 久留米市において開催された博覧会が、なぜ全国発明品博覧会であったのか

ここで、なぜ久留米市において、全国の発明品を一堂に会した博覧会が開催されたのか、違う見方をすると、久留米市で開催される博覧会がなぜ他ではなく発明品に特化したものとなったのか、という疑問についても考えを巡らせておこう。

第2節でも既述したとおり、1918年前後の時期の日本では、第一次世界大戦の影響を受けて輸出が増大し、産業が飛躍的に躍進した⁸⁷。そして、それに随伴す

⁸⁶ 全国発明品博覧会（1918）、15頁。

⁸⁷ 山崎広明（1973）、20頁。

るかたちで日本経済も進展した。

産業史的な視点から鳥瞰するならば、アジア市場から後退を余儀なくされた欧米諸国に代替するかたちで、その市場を席卷することとなったために、日本の産業は当該期に爆発的な躍進を遂げることとなったのである。この傾向は、綿工業分野においても顕著であった⁸⁸。そして、その余波は久留米絣や縞といった綿製品の製造を主要な産業とする、綿工業が盛んであった久留米市にまで到達していたといえる。

一般的にいつて綿工業は、周知のとおり産業革命の引き金ともなった重要な産業分野であり、当該分野における機械化や蒸気力の導入による動力の変化が工業化全体に果たした影響力は、計り知れないものがあった。綿工業が近代化していく過程において、種々の機械や動力装置といった新しい発明品の出現が産業革命を達成することを可能とし、またその後も様々な産業分野で間断なく続く工業化の呼び水となったのであった⁸⁹。

そして、これを世界で一番最初に達成した国はイギリスであった。このことは、世界史的に見ても周知のことである。

近代初頭に日本は、そのイギリスからあまりにも多くのことを学び、その在り方のある種近代化の理想形態として描くこととなった⁹⁰。日本は、イギリスの工業化の過程を擦ることで、見えないはずの未来像を可視化し、殖産興業政策などを展開しつつ、工業化への道を不撓不屈に邁進したのであった。

この過程で、発明品である様々な産業機械がイギリスから日本へと輸入されていたし、日本国内においても種々の機械が発明されたのは周知のとおりである。発明品の存在は、工業化の進展と不可分の関係性にあった。このことは、工業化

88 山崎広明（1973）、32 - 36頁。

89 日高千景（1996）、53 - 67頁。

90 湯沢威（1996）、1 - 2 頁。

のカギとなった綿工業においても、もちろん同様であったといえる。このような理由により、久留米絹関係者を商工業種の中核に置く綿工業が盛んな久留米市において、蓋然的に発明品に対する注目度が高かったのではないかと考えられる。

もう一つ看過できないのは、久留米市におけるからくり儀右衛門こと、田中久重という発明家の存在の重さである。田中久重の生涯については、石野斐夫(1931)「年譜（1 - 13頁）」が、その詳細まで追ったものである⁹¹。ここでは、それを簡潔にまとめた河本信雄（2019）に依拠して説明を加えておこう。

河本信雄（2019、3頁）によると、田中久重は寛政年間に九州筑後国久留米に生まれ、江戸時代の後半期に当たる20代から30代前半にかけてはからくり人形を制作し、その人形をもって諸国を興業で行脚した。その後、上方に移住して、時計や諸機械の制作・販売を行った。上方滞在時に蒸気船を製造し、これによって当時、西洋式の科学技術を必要としていた各藩の耳目を引くこととなった⁹²。

田中久重は、幕末期には50代を過ぎていたが、西洋の技術知識を習得すると、佐賀藩に技術者として招聘され、西洋技術の導入や製品の製造に携わった。幕末期において佐賀藩は、反射炉を建設し大砲の砲身などの鑄造を目指すため精錬方を設けていた⁹³。田中久重はこの精錬方に招聘され⁹⁴、アームストロング砲を模した砲身などに代表される砲煩関係品の製造に成功した⁹⁵。その後、故郷の久留米藩にも出仕し、諸般の技術の近代化に尽力したのであった。

明治期には、70代半ばで東京に出て、後に大手電機メーカーとなる東芝の前身となる工場を作ったことでも知られている⁹⁶。この後、田中久重は1881年に没した。

91 石野斐夫（1931）は、「年譜」、「文献」、「本伝」、「田中近江翁顕彰会紀要」の4部構成となっており、それぞれの部の始まりが1頁となっているため、本論文はその構成に従って表記している。

92 工業之大日本社（1920）、50頁。

93 服部一馬（1965）、419 - 420頁。

94 工業之大日本社（1920）、50頁。

95 小澤太郎（2013）、44頁。

96 河本信雄（2019）、3頁。

田中久重の没後50年が経過した1930年前後の時期になると、久留米市の地元名士が集まって、この田中久重について顕彰しようという動きが活発となった。実際に、1930年には田中近江翁顕彰会（以下、単に「顕彰会」と略述する）が正式に発足することとなった⁹⁷。この顕彰会は、没後50年を区切りの年として、田中久重の「我国の文化と経済上に貢献せられたる偉功」を顕彰することを目的とした組織であった⁹⁸。

顕彰会の発起人には、黒岩万次郎、佐々木巳喜次、田中源太郎、細見保、田村和六、武藤直治、野田実、山口元蔵、中川喜次郎の名前が連なっている⁹⁹。以上のメンバーの内、細見保、田村和六、中川喜次郎は表3からも、その氏名が看取できる人物である。この顕彰会の活動によって、田中久重の伝記の出版や、胸像の建設が計画され実現していくに至った¹⁰⁰。なお、顕彰会の会長は石野斐夫であり、代理副会長は中川喜次郎であった。

1930年に顕彰会の設立が発起される以前においても、久留米市において田中久重を顕彰しようとする動きは存在した。それが、他ならぬ1918年に開催された久留米発明博の際であった。そのことが明確に確認できる資料を引用しておく。

全国発明品博覧会の近江翁追彰 偉人の声誉は、年を経て益々香しく、大正七年には、全国発明品博覧会が久留米市に於て開催され、総裁阪田男爵、会長石津市長の名を以て、近江翁の追彰をし、追彰状並記念品を遺族に贈られた。

追彰状

故田中久重翁は実に近代の大発明家なり。幼より聡慧巧思に富み齡始めて九

97 石野斐夫（1931）「田中近江翁顕彰会紀要」、1 - 2 頁。

98 石野斐夫（1931）「田中近江翁顕彰会紀要」、1 頁。

99 石野斐夫（1931）「田中近江翁顕彰会紀要」、1 頁。

100 石野斐夫（1931）「田中近江翁顕彰会紀要」、11頁。

歳奇巧なる家庭用品を創作したる以来、家庭工業、機械工業、農具、防火、揚水、染色渡金、製菓、汽車、船舶、兵器の類に至る迄、其発明改良を加へたるもの枚挙に遑あらず。齡八十三歳を以て没するに至る迄、自ら孜孜として創作に従事するのみならず、循々として幾多の門人を教導せり。殊に其発明に係る久留米絣絵模様の製法及傘轆轤の製造器機の如きは地方重要物産発達の基を為し、久留米市内は言ふに及はず其德澤遠近郡村に及へり。其発明の効果顕著にして国利民福を進めたる功績実に偉大なりとす。依て之を追彰し且記念品を其遺族に贈る。

大正七年五月八日

全国発明品博覧会総裁従三位勲一等 法学博士男爵 阪田芳郎

全国発明品博覧会長 久留米市長正五位勲四等 石津和風¹⁰¹

ここから分かるように、田中久重は久留米発明博において、同博覧会を運営する組織から久留米出身の偉大な発明家として、総裁を務めた阪谷芳郎と、会長を務めた石津和風との連名で、追彰されたのであった。

久留米発明博の開催に至る過程においても、田中久重の存在が強く意識されていたことについては、国武金太郎編（1918）からもその様子を看取することができる。国武金太郎編（1918）は、『田中近江大掾源久重』というタイトルの書籍で、1918年4月17日に東京芝区愛宕下町2丁目4番地の山本印刷所で印刷され、同年同月27日に発行された。奥付を見ると、編集者は国武金太郎で、発行所は全国発明品博覧会協賛会と書かれている¹⁰²。

つまり、田中久重についての書籍が、久留米発明博の協賛会より公式に出版さ

101 全国発明品博覧会（1918）、21 - 22頁、石野斐夫（1931）「本伝」、239 - 240頁、久留米市役所（1932）、331 - 332頁。

102 国武金太郎（1918）、奥付。

れていたのであった。この書籍が出版されたという事実からも、発明博覧会を開催するに際し、久留米出身の発明家であった田中久重の存在が強く意識されていたことが分かる。

さらに国武金太郎編（1918）の内容に踏み込んでおこう。序文では、久留米出身の田中久重を「我国の大発明家」と位置付けている¹⁰³。なぜ大発明家なのかというと、「西洋との交通未だに開けず、文化未だ普からざる当時在」って、万年時計や蒸気機関、砲煩などの数々のものを「発明創造」し、それらの功績が「其の当代を益し後世を利したること蓋し図り知る可からざる」ためであるとの説明がなされている。発明家・田中久重が幕末から明治期にかけて達成したことが、後世の日本の技術発展に多大なる貢献を果たしたことが強調されているのである。

そして、当該期の日本が「文化大いに開け、科学の発展著しきものありて幾多の大発明を見るに至りたりと雖も、之を欧州の現状に比すれば、及ばざること甚だ遠きものある」状態であるため、発明をより「奨励し、之を鼓吹する」ために久留米発明博の開催に至ったと解説されている¹⁰⁴。つまり、発明家・田中久重の出身地である久留米であるからこそ、この地で開催された博覧会のテーマが発明品にフォーカスされたものとなったのであった。

そして、この久留米発明博の開催を機として、「翁の如き大偉人の事業を施錠に紹介し、且其の遺績を顕彰する」必要性も叫ばれたのであった。協賛会は久留米発明博の開催を直接支援しながら、もう1つの側面として久留米出身の発明家・田中久重の業績を顕彰することを、「本会の責務」として位置づけていた¹⁰⁵。協賛会には、このような役割もあったということをここでは強調しておく。

103 国武金太郎（1918）、1-3頁。

104 本論文の場合は、地方における発明博について検証したものであるが、國雄行（2002、37頁）において、共進会が参加者や事業者を鼓舞することにより、これによって産業育成に弾みをつけようとするにであったことが指摘されており、ここに共通性を見つけることができる。

105 国武金太郎（1918）、2頁

以上のようなことを振り返って考えると、久留米の名士たちの動きに代表されるように、久留米において田中久重の存在は、近代技術や発明と不可分の関係にあったと認識されていた。そして、それを顕彰していくことが久留米の後進の責務として捉えられていた側面もあったことが確認できた。それが、久留米における先達の発明家であった田中久重の存在の重みであったといえよう。加えて地域社会という視覚から照射した場合、この発明家が存在したことが、久留米市という地方自治体において、発明品に特化した博覧会が開催される大きな要因となったこともまた、歴史的事実を構成する要素の1つであった。

おわりに

本論文では、1918年に久留米市において開催された全国発明品博覧会について焦点を当てた。本稿では、この博覧会を久留米発明博と呼称した。

第1節では、久留米発明博を検証していくうえで、根幹となる資料である全国発明品博覧会（1918）と久留米市役所（1933）とについて、両者を比較検討して資料批判を行った。この結果、久留米市役所（1933）は、全国発明品博覧会（1918）から資料の一部を抜粋して復刻したものであり、章節のタイトルや、そこに書かれている内容の情報量に大差があることが確認できた。このため、本論文では全国発明品博覧会（1918）を主な分析の対象として採用している。

第2節では、①久留米発明博はどのような趣旨を持つ博覧会であり、なぜこの時期に開催されたのか、②そしてそれは実際にどのような経緯をもって開催されるにいたったのかについて、全国発明品博覧会（1918）という一次資料をもとに考察した。その結果、久留米発明博は第一次世界大戦の影響を受け、発明品が重要視される世相を受けて、その普及や発展を目的として開催されたことが分かった。加えて、久留米発明博を開催するにあたっては、細かな諸規定やルールが明

文化されて定められていったことも確認できた。

第3節では、久留米発明博の開催を推進し、その運営の担い手となった人材たちに焦点を当て、組織の人的構成について分析を行った。この結果、久留米発明博を推進した組織には、博覧会の運営組織と協賛会との2つの組織が存在していたことが分かった。そして、この博覧会が、農商務省系や内務省系の中央官僚グループと、久留米市の政治や経済界の代表的な人材とを混成した組織によって運営されたことが確認できた。そして、その一方で、久留米市の実業家グループが中心となって組織された協賛会が、博覧会の運営組織ではカバーしきれない宣伝などの活動を行っていた。この両者によって、全国⇄地方の双方向に対応できる分業体制が確立されていたことを明らかにできた。

第4節では、そもそも久留米市において開催された博覧会が、なぜ全国発明品博覧会であったのかという謎に迫った。この節では、第2節で検討した第一次世界大戦という時代背景のほかに、いったいどのような要因が久留米市において発明品に特化した博覧会を開催せしめたのかについて考察した。その結果、久留米出身の発明家である田中久重の存在が、博覧会の運営に携わった同市の名士たちの間で重要な意味を持っていたことが確認できた。田中久重については、現在も久留米の町で敬愛される対象である。例えば、JR久留米駅前には、チェッカーズなどの代表曲と供に時を知らせるからくり時計が設置されており、1時間おきからくりとなった儀右衛門翁が登場する。また、五穀神社には顕彰碑などがある。

はじめにでも述べた通り、近代日本の国内、特に地方都市において開催された博覧会については、いまだその定義や概念規定が十分になされているとは言い難い状況である。この原因の1つは、近代日本の地方自治体で開催された博覧会についての分析が十分に行われておらず、サンプル数が少ないことが挙げられる。この問題を解決するためには、まず近代日本の地方において行われた博覧会につ

いての研究蓄積を図ることが急務であるといえる。本研究は、この地方博研究の抱える問題を解決するための事例研究という性格も有している。

最後に一つ付言しておこう。万国博については、長らく一般博と特別博に区分されてきた。はじめにや西尾典子（2023）でも述べた通り、日本国内で行われた博覧会に関しては、特に地方博と区分されるものについて未だ研究蓄積がなされている状況であり、詳しい区分については道半ばといったところである。

本論文では久留米発明博と呼称した、久留米市において開催された全国発明品博覧会が、どのような位相に位置付けられる博覧会であったのかと考えてみると、この博覧会は、内国特別博という位相に位置付けられる博覧会であったのではないであろうか。なぜなら、久留米発明博は、日本国内において地方自治体と内務省と農商務省とが協力して举行された、特別なテーマを設けた博覧会であったからである¹⁰⁶。

本稿の目的は久留米発明博についての分析であるため、内国博をどう位置づけるのかといったことには踏み込まない。しかし本稿で行った研究分析の先には、果たして内国博は、一般博と区分されるものなのか、あるいは特別博であったのか、それともその両側面を内包する性格のものであったのかという議論も起こることであろう。この点に関しては、内国博研究の第一人者である國雄行の研究の進展を待ちたい。

参考文献

- 石上敏（2012）「博覧会の諸相」『大阪商業大学商経学会』7 - 4
石田あゆ（2009）「昭和前期と国産洋服博覧会（第3章）」福岡良明ほか編「博覧の世紀」梓出版社
石野斐夫（1931）『田中近江大掾』田中近江大掾顕彰会

106 同様の博覧会には、1897年に神戸市で開催された水産博覧会や、1918年に東京府で開催された電気博覧会などの存在が挙げられるであろう。

- エーリッヒ・ルーデンドルフ著・間野俊夫訳（1938）『国家総力戦』三笠書房
- 大蔵省印刷局（1911）『官報』
- 大蔵省印刷局（1912）『官報』1912年3月19日
- 大野真由（2016）「明治七年における若松博覧会」『駒沢史学』86
- 大貫涼子（2012）「地方博の変容（序論）」『國學院大學博物館學紀要』37
- 小川玲美子（2015）「1930年代金沢の観光都市への転換」『デザイン理論』65
- 尾島志保（2016）「地方博覧会と観覧者層」『富山市民俗民芸村村報』2
- 小澤太郎（2013）「久重が製造したのはアームストロング砲だったか」からくり儀右衛門展
実行委員会編『からくり儀右衛門展』からくり儀右衛門展実行委員会
- 河本信雄（2019）『田中久重と技術の継承』思文閣出版
- 河本信雄（2021）『田中久重と技術』玉川大学出版部
- 國雄行（2002）「内務省の勸農政策（1873～1881年）」『社会経済史学』67 - 6
- 国武金太郎（1918）『田中近江大掾源久重』全国発明品博覧会協賛会
- 久留米市史編さん委員会編（1985）『久留米市史』第三巻 久留米市
- 久留米市是調査委員会編（1907）『福岡県久留米市是』久留米市是調査委員会
- 久留米市役所（1933）『久留米市誌』中編 久留米市役所
- 久留米青年会議所編（1994）『ぎえもん』久留米青年会議所
- 「田中近江大掾の偉業」工業之大日本社（1920）『工業之大日本』49 - 5
- 額頌厚（2010）『総力戦体制研究』社会評論社
- 西園寺公望（1912）「福岡県属戸川槌次郎外九名任官の件」『明治四五年任免三月二』巻六、
2A - 19 - ㊦ B637、国立公文書館所蔵、file:///C:/Users/nitro/AppData/Local/Temp/
Temp1_2789479.zip/2789481.pdf
- 坂田謙司（2009）「北海道の地方博覧会（第9章）」福岡良明ほか編「博覧の世紀」梓出版
社
- 佐野実（2021）「明治初期の博覧会政策にみる地方社会の多様性と序列化」『21世紀アジア
学研究』19
- 三条榮三郎（1931）「建築構造の関係より見たる水城関門趾の礎石に就て」筑紫史談会『筑
紫史談』52
- 塩原佳典（2012）「明治初年台における地方博覧会の歴史的意義」『日本歴史』768
- 七字魁編（1924）『帝国発明協会沿革』帝国発明協会
- 篠原正一（1981）『久留米人物誌』久留米人物誌刊行委員会
- 小学館国語辞典編集部（2006）『精選版 日本国語大辞典』第三巻 小学館
- 瀬戸口龍一（2021）「沢沢栄一と専修大学初代総長・阪谷芳郎」『専修大学校友会誌
Adonis』97 - 2
- 全国発明品博覧会（1918）『久留米市開催全国発明品博覧会記念帖』久留米市
- 武田令太郎編（1922）『新築記念誌』久留米商業会議所
- 竹本英代（2023）「阪谷芳郎の日本語学校論」福岡教育大学紀要72

- 土屋喬雄（1943）『国家総力戦論』ダイヤモンド社
- 帝国自治協会（1938）『全国市長名鑑』帝国自治協会
- 東芝未来科学館田中久重編集委員会編（2014）『田中久重』東芝未来科学館
- 童門冬二（2005）『小説 田中久重』集英社
- 永江雅和（2014）「発題 阪谷芳郎の人的ネットワーク」『神園』11
- 新村出（2008）『広辞苑（第七版）』岩波書店
- 西尾典子（2023）「近代日本の博覧会に関する研究と課題」『ビジネス研究』8
- 西尾林太郎（2019）『阪谷芳郎』吉川弘文館
- 西尾林太郎（2021）「阪谷芳郎と『ベルン平和会議』」『政治経済史学』660
- 農商務省（1917）「農商務省令第二十八号」大蔵省印刷局編『官報（日刊）』1561号大正6年10月13日
- 長谷川司（2009）「戦前地方博覧会における地域イメージの構築」『総合政策研究（関西学院大学）』31
- 長谷川正道（1944）『近代戦と機械化国防』博多成象堂
- P.F. コーニッキー（1986）「明治五年の和歌山博覧会とその周辺」吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版
- 秦郁彦（2001）『日本官僚制総合事典』東京大学出版会
- 秦郁彦（2002）『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会
- 服部一馬（1965）「幕末の洋式工業（第12章）」児玉幸多編『体系日本史叢書11産業史Ⅱ』山川出版社
- 土方新太郎（1901）『福岡県一円富豪家一覧表』福岡県名所発起所
- 日高千景（1996）「綿業の盛衰（第4章）」湯沢威編『イギリス経済史』有斐閣
- 福岡良明ほか編（2009）「博覧の世紀」梓出版社
- 丸山宏（1986）「明治初期の京都博覧会」吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版
- 箕作秋吉（1932）『毒瓦斯と其の防御』三省堂
- 三和良一（2002）『概説日本経済史 近現代』東京大学出版会
- 山崎広明（1973）「第一世界大戦と日本帝国主義」林健久ほか『講座帝国主義の研究6 日本資本主義』青木出版
- 湯沢威（1996）「イギリス経済史研究の視角（第1章）」湯沢威編『イギリス経済史』有斐閣
- 横山秀樹（1980）「新潟県における明治時代の博覧会・博物館史」『國學院大學博物館學紀要』5
- 米田英夫・高島宗三（1923）『特許のカギ（再訂版）』早稲田大学出版部
- 歴代知事編纂会編（1985）『日本の歴代市長』第3巻